

【議事概要】

宇宙探査に係る国際ワークショップの報告について

JAXA の宇宙科学研究本部の川口淳一郎教授が、資料 19-2 (WS の報告) を説明した。その後、以下の議論が行われた。

野本：ヨーロッパは月を跳ばして火星に行こうと考えているのか。

川口：技術的には月を経由しないと火星に行けないということはないので、無理な計画であると一概には言えない。また、ヨーロッパは月に科学的な興味を持ってないことから、火星に行く計画を進めていると説明している。

野本：イタリアでの参加 8 カ国とは何処なのか。日米の外はヨーロッパの各国なのか。

川口：そうである。

青江：これから先の転がり具合⁸はどのように予想できるか。

川口：(質問が漠然としており、意図が判らないためであろう。聞き取りにくく、発言内容が把握できなかった。)

青江：NASA が引張って行く状態が続くということか。

川口：一年間は間違いなく続く。12 月のヒューストンまでは NASA が引張る。ESA が引張るとは言い出さない。

青江：ESA が引張らない理由は。

⁸ 何の意図を持って質問しているのか判らなかった。後の質疑に出てくる月条約の件とそれに続く発言で判るように、両ワークショップは外交問題を扱っている。他国の動向に一々振られていること自体が、稚拙な決断に繋がりがねない。

川口：オーロラ計画で〇〇 (メモできなかった) ユーロも使ってしまうと、実際のところ余力は無い。

青江：グズグズという状態が続きますよね。要は、日本は暫く高みの見物というのかもしれませんが、進捗状況を把握するということに徹することにすれば良い。

川口：例えば日本の宇宙飛行士が宇宙で活動したということになれば、ヨーロッパは黙ってみているということは無いですでしょう。逆に、ヨーロッパが活動しているのをわが国が黙ってみていることも無い。

野本：中国はどんな姿勢でしたか。途中で帰ってしまったと聞いたが。

川口：ワシントンに出席した中国人は 4 人で、航天局 2 名、大使館 1 名、所属不明が 1 名であった。初日だけ参加し、二日目から顔を出さなかった。個人の意見を述べることを避けたのだと思う。イタリアでは二人の大使館員だけが出席していた。

また、会場で聞いたことではないが、何人かに聞いた結果、チャンア 1⁹については意見が揃っているが、チャンア 2 については意見がバラバラであった。

青江：ブッシュのビジョンは、「有人宇宙をやる。自分だけではできないということで世界に呼びかけている」と認識して良いのか。

⁹ 中国の月探査プログラムで、周回機、着陸機、サンプルリターンからなる計画の第一弾、周回機がチャンア 1 で、2004 年の計画では、2006 年末から 2007 年に打ち上げる予定である。

川口：米国は月条約を批准していない¹⁰。アポロの頃には月に行ける唯一の国であったから、安心していた。しかし、月に行けそうな国がたくさん出てきて、うかうかして居られなくなったと云う所であろう。これは月を何の対象として捕らえるかということから来るもので、国民の認識の差には驚いた。

井口：米国単独ではやらないというのは確かなのか。

川口：一つには予算の突出を避けたいことがある。また、国民が納得しないことも大きな理由である。一方、技術的には（米国一国で）できるとの発言は多かった。

井口：ISS モデルと GEO モデルがあるとのことだが、ISS のように大きなものは一緒にやり、ある纏まった部分を日本が担当するというので、分担が成立する。日本が進むべき道をまず決め、それに基づいて協力の仕方を考えて行くという訳にはいかないのか。

松尾：認識の差というのは気になっていたが、(宇宙研つながりで言葉を省略しても互いに理解できるらしく、メモが取れなかった。米国が各国に探査プロジェクトへの参加を促している、背景にある意図を確認する発言)

川口：そのように思います。

¹⁰ 批准している国は 2003 年 4 月現在でオーストラリア、オーストリア、チリ、カザフスタン、メキシコ、モロッコ、オランダ、パキスタン、フィリピン、ウルグアイの 10 カ国で、署名している国はフランス、グアテマラ、インド、ペルー、ルーマニアの 5 カ国である。

松尾：イタリアで開催した意図は何だと思うか。

川口：米国の進め方に対応し、ヨーロッパのスタンスを示すことが必要と考えたものだと思う。

野本：イタリアでワークショップが開催された時期は、ベルスコニーニ政権が倒れる前のことである。変化があるかもしれない。

川口：ウォッチする必要があると思う。

松尾：日本の参加者は米国のとき 4 名でイタリアのとき 7 名である。何か理由があったのか。

川口：イタリアの参加者数は大使館員の人数を含めた数で、**米国のものは含めていない数¹¹**である。また、イタリアへの参加が危ぶまれていた人が結局参加できるようになったこともある。欧州に重点を置こうというような意図は全く無い。

青江：選択と集中の案を持ってきてくれると助かる。

川口：月探査・国際協力関連の計画を検討中である。

¹¹ 両ワークショップ参加者数の差から推定される大使館員の人数は 2 になる。文科省出身のワシントン駐在員は 1 名なので、外務省官僚も随行していたと推定できる。この推定が正しいことに期待する。